

〈アンケート企画〉

その「鍵括弧」はどういう意味で使っていますか？

企画・木村悠之介

企画の趣旨

学術論文において、鍵括弧「」をはじめとする約物^{やくもの}をどのように用いるか。それは組版のとき¹だけではなく、執筆の過程でも皆さんを惑わせるのではないのでしょうか。

特に今回の主題である鍵括弧は、人により時により、様々なニュアンスで用いられてきました。例えば、「現在でも公用文、学校教育その他で参考にされ」る「くぎり符号の使ひ方」（文部省教科書局、1946年）²では、「カギは、対話・引用語・題目、その他、特に他の文と分けたいと思ふ語句に用ひる」と述べられています。また、哲学的な価値判断をめぐる文脈においては、判断の留保を意味する慣用句として“括弧に入れる”が用いられ、実際に鍵括弧を伴うことがあります³。

論文名や台詞に用いることはコンセンサスがあるとして、当事者概念・分析概念、留保が必要な言葉、単なる強調……、他にも挙がるかもしれません。人によってはダブルクォーテーション“”や山括弧〈〉など、他の括弧類と使い分けることがあるでしょうし、分野やTPOによっても状況は異なってくるはずです。実際、この企画案について他の分野の方にご意見を伺った際は、私が思いもしなかったような話を教え

1 『人文×社会』組版チームのnoteには、括弧にまつわる記事もいくつか上がっています（「段落はじめのかっこは慎ましい!? かっこの字幅をめぐって」<https://note.com/jinbunxshakai/n/nb8063eb348bc>、など）。

2 https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/sanko/pdf/kugiri.pdf。

3 例えば本誌でも、ディスカッション「歴史学と哲学の方法論的交差——感情史をめぐって」（『人文×社会』第2号、2021年）20頁において貝原伴寛氏が用いています。

ていただいたりもしました。

しかし、学術論文におけるこうした括弧類の使い分けを論じた記事は見たことがありません⁴。それは、分野によって作法や認識がかなり異なるからなのか、逆に、その時々で読者が読み分ければ事足りる程度の差異しか存在しないからなのか。本アンケートでは、人文系の論文執筆に携わる皆さんが鍵括弧その他の括弧類についてどう考えているのかを伺うことで、学術コミュニケーションにおける一つのきっかけを提供できればと考えます。

このような趣旨のもと、2022年5月3～20日に『人文×社会』のSlackコミュニティ上で回答を募り、6名の方からご回答をいただきました。まことにありがとうございました。アンケートとして多い回答数では全くありませんが、もともと量的な分析ではなく具体的な経験を集めることを目的とする企画ですので、そのまま誌上でご紹介する次第です（戦前の雑誌でよくある「諸家の意見」のようなイメージです）。

以下、各質問文の後ろに人ごとの回答（到着順）原文と、それらに対する木村の簡単なコメントを付します。

1. 以下の括弧類について、ご自身（場合によっては近い研究分野の方々）が論文を執筆する際にどのようなニュアンスで用いておられるか、教えてください。

1.1. 鍵括弧「」

* Aさん／哲学

引用文（一次資料であれ二次資料であれ）を明示するために使います。インラインの引用の場合はもちろん、引用から抜き出されたキーワードの場合も鉤括弧にします。逆に、語句を強調する場合には、引用との混同を避けるため極力使わないようにしています。

例) ここには明らかに、マリオンの言う「存在 - 神 - 論」的構造が認められる。

4 ビジネスシーンについては、国立国語研究所の寺島宏貴氏から、同研究所の岩崎拓也氏による動画「ビジネス文書における「カッコ」の使われ方」(<https://www.youtube.com/watch?v=Lx4gGruo69s>, 2021年9月公開)をご教示いただきました。発注文書の件名では隅付括弧【】が高頻度で用いられる、という内容です。また、Wikipediaの項目「括弧」はけっこう色々な場の例が出ていて面白いです。

* B さん／歴史学（明治メディア史）

論文中でのキー概念（「公論」等）、および地の文に史料を引用する際に使用。

* C さん／日本近代史

引用、留保、強調、論文タイトル

* D さん／国際関係史

(1) 論文（博論を含む）やアルバム収録の作品のタイトル、(2) 原文引用、(3) スローガンやフレーズ、歴史的概念の強調、(4) 皮肉や当て擦りを込めた語彙の強調

* E さん／哲学史

具体的に典拠のあるものを直接引用する際に用いる、論文名を括るときに用いる

* F さん／芸術学

短い引用、特定の意味の概念であることの明示（自分が作った概念や今回の語の定義であれば初めて示す場合に、先行研究での概念の定義であれば常に「」でくくる）、曲名、講座名、記事タイトル、HP のページタイトル。強調で使っている人を見たこともある（私は強調では使わない）。曲名ではなく曲集名をこちらにする慣習がある分野で発表したり論文を出したりするときはそれに従うが、演劇の作品名や公演名をこちらにする慣習があるところでは私は従わないことに決めている（私はそれらは『』で必ず書く）。ただし、公演名であっても作品名ではなく、その公演のプログラム中に少なくとも一つ以上の作品名（『』で書く）が存在し、タイトルとしては公演名よりプログラム内の作品名の方が確実に重要であり公演名が副題のような序列になる場合には、公演名は「」で書くようにしている（「新春歌舞伎」「仕舞を観る会」など）。

* G さん／近代日本宗教史

論文題のほかだと、史料において当事者が用いている表現を引く場合のみ用いるように（最近）しています。分析概念・留保・強調には使いません……と言いたところですが、当事者から引いた言葉を元に分析を進めたり、当事者の価値判断を追認するわけではなかったり、当事者がその言葉を用いていることに注意を促す側面が、それぞれあるとも見做せます。

木村のコメント

Dさんによる類型化のうち、(1)論集や作品集に収録された個々のタイトル、(2)原文引用、については異論が見られませんでした。他方、(3)の強調については、史料を元にしたキーワードの場合は用いるが、そうでない場合は避けるという立場が見られます(Aさん・Gさん。Fさんも「強調では使わない」とのこと)。(4)も確かに見かけることがありますね。この類型以外では、Cさんが“留保”を挙げています(企画の趣旨で触れた“括弧に入れる”用法)。

1.2. 二重鍵括弧『』

* Bさん／歴史学(明治メディア史)

参考文献に使用した出版物、および「」内での引用の際に用いる。

* Cさん／日本近代史

書籍タイトル

* Dさん／国際関係史

(1)著書や映画・音楽のタイトル、(2)一重括弧引用内の「」を提示するとき。

* Eさん／哲学史

書名を括弧するときのみ用いる

* Fさん／芸術学

書籍名、雑誌名、作品名、曲集名など、出版・公開された時の一番大きいタイトル名。また、演劇の作品名や公演名(「」で書く人もいるが、私は『』と決めている。前項参照)。曲集名ではなく曲名をこちらにする慣習がある分野で発表したり論文を出したりするときはそれに従う。

* Gさん／近代日本宗教史

書題に用います。鍵括弧で引用すべき文のなかに一重鍵括弧があっても、それを二重鍵括弧に変えるということはしません(もともと二重鍵括弧がある場合との区別がつかなくなるため)。

木村のコメント

論集や作品集をはじめ、一定のまとまりを持った書籍や作品に用いられることが共通します。他方、鍵括弧内での引用については差が見られます（2.におけるCさんの回答もこれに関連）。

1.3. ダブルクォーテーション “” / 縦書きの場合はノノカギ “”

* Aさん／哲学

英語のものを書くときにはもちろん使います。日本語原稿の場合、ラテン語や英語の原語を示す場合に使うことはありますが、やはり日本語文中にあると美しく見えないのでできるだけ避けています。

例) ここの“realitas”という語を村上は「実象性」と訳している。

* Bさん／歴史学（明治メディア史）

例えば新聞の記事中にある和歌など、史料中の引用を提示する際に使用。発表レジュメで視覚的に使用するため、論文ではこの限りではない。

* Cさん／日本近代史

滅多に用いません。

* Dさん／国際関係史

欧文の論文タイトル（独仏は少し異なる事情がある。またロシア語を除く）

* Eさん／哲学史

英語の原語を指示するさいに用いる場合がある、英語論文のタイトルを括弧に用いる

* Fさん／芸術学

ダブルクォーテーションは英文において「」と同じ意味で使う。ノノカギは私は使わないが、縦書での論文や書籍において「」と同じ意味で使われていると勝手に理解している。

* Gさん／近代日本宗教史

ダブルクォーテーションは欧文の論文題や引用で用います。和文では、当事者が用いていない言葉を何かしら強調する必要がある場合や、論争的な概念を完全な地の文とはせずに留保する際（“国家神道”など）、さらに先行研究からの引用について試行的に使ってみています（以前はいずれも鍵括弧を用いていました）。なお、いわゆる〇〇、というニュアンスを示したいときには鍵括弧やノノカギで示そうとするのではなく、明確に“いわゆる〇〇”と述べるようにしています。

木村のコメント

欧文に使うことは共通し（Aさん・Dさん・Eさん・Fさん・Gさん）、鍵括弧に近い意味で用いられることもあるようです（Fさん・Gさん）。他方で横書きと縦書きのほか、レジュメかどうか（Bさん）というTPOにも関わり、「美しく見えない」という視覚的な側面が注意されます（Aさん・Bさん）。これは他の括弧類にはない特徴でした。

1.4. 山括弧〈〉／不等号<>

* Aさん／哲学

引用ではなく、自分の主張にとって重要な語句を強調する場合に使います。

例) デカルトの第一哲学は〈思うこと〉を基礎とする。

* Bさん／歴史学（明治メディア史）

丸ガッコの中でカッコを使う必要のある場合に用いる。例えば年代表記を行う際、「(明治元年〈1868〉)」の如く。

* Cさん／日本近代史

論文中のキーワードとなるような特殊な用語を括ることがあります。山括弧つきの〈〇〇〉と括弧なしの〇〇を区別し、特別な定義を行う場合もあります。

* Dさん／国際関係史

一般的な用法とは異なる、あるいは限定的なニュアンスで使う重要な概念を示すとき（〈歴史〉〈表象〉〈神話〉など）

* Eさん／哲学史

キーワード等を強調するさいに用いる

* Fさん／芸術学

曲集名を<>で書いている人たちをよく見る（学会誌『音楽学』の投稿規定など、そう書くよう決められているところがあるし、音楽系では慣習としてそうなっている）。概念の強調や特定の意味の付与をこれで示すよう決められている投稿規定をみたこともある（『音楽教育学』の投稿規定、『社会学評論』のスタイルガイド「記述上の約束事」など）。

* Gさん／近代日本宗教史

山括弧は重要な分析概念に用いる場合を見かけますが、自分では使いません。丸括弧内の括弧（元号併記）について使うようにという執筆要項を見たことがあります。

木村のコメント

山括弧は、地の文での特別なキーワードとなる分析概念（Aさん・Cさん・Dさん・Eさん・Gさん）、および丸括弧内での括弧表記（Bさん・Gさん）で用いられるようです。Fさんの分野（音楽学）では曲名に山括弧や不等号を使うとのことで、特徴的です。『音楽学』の投稿規定では山括弧について「不等記号< >とは異なるので注意」とわざわざ注意が付されているのに対し、『音楽教育学』では「ギュメまたは山パーレン」の名前で不等号が示されています。なお、『音楽教育学』における山括弧／不等号は概念の強調であるのに対し、『音楽学』では楽曲名に限られ、強調は鍵括弧、「特に力点を置く字句」は傍点を用いるとされています。

1.5. 二重山括弧《》／ギュメ《》

* Aさん／哲学

フランス語やドイツ語の語句をそのまま引用する場合にはギュメを使います。

* Bさん／歴史学（明治メディア史）

原則、論文では使用しない。

* Cさん／日本近代史

滅多に用いません。

* Dさん／国際関係史

(1) フランス語の論文や論集所収の作品のタイトル (2) フランス語からの原文引用

* Eさん／哲学史

芸術作品名を括るときに用いる、ギュメは仏語の論文をタイトルを括るさい、あるいは仏語の原語を指示するさいに用いる

* Fさん／芸術学

作品名を《》で書いている人たちをよく見る（学会誌『音楽学』の投稿規定など、そう書くよう決められているところがあるし、音楽系では慣習としてそうなっている。また、明治以前を対象とする研究者あるいは日本文学系の研究者および音楽系の研究者では、能の作品名は、これでくくるのが慣習と思われる。《葵上》など。一方、近現代演劇の研究者は、『葵上』と書いていると思われる）。

* Gさん／近代日本宗教史

二重鍵括弧はルビ表記に用いるイメージがあったので（青空文庫に特有の記法？）、プレゼンテーションでルビを大きめの文字で表す際に使ったことがあります。論文では使いません。

木村のコメント

二重山括弧は作品名（Eさん・Fさん）、ギュメはフランス語など（Aさん・Dさん・Eさん）に関連して用いられています。演劇学では扱う時代によっても異なる（Fさん）というのは面白いですね。ルビの記法（Gさん）は青空文庫やカクヨムなどの文章系サイトで用いられますが、あくまで記法であって実際の表示では通常のルビとして出てくるようです。

1.6. 亀甲括弧〔〕

* Bさん／歴史学（明治メディア史）

引用史料において、著者による注を表す際に用いる。

* C さん／日本近代史

引用文中に注釈を挿入する際に使います。

* D さん／国際関係史

原文引用内に引用者による注釈を加えるとき（〔引用者注：日本共産党内のジャーゴン〕）

* E さん／哲学史

訳文中での筆者による補足を付け足すさいに用いる

* F さん／芸術学

引用内での引用者注、中略など、引用者による操作

* G さん／近代日本宗教史

引用文に補足を行う場合に用います。

木村のコメント

これは一番コンセンサスが取れていました。

1.7. 大括弧 []

* B さん／歴史学（明治メディア史）

原則、論文では使用しない。

* C さん／日本近代史

- ・ いわゆるハーバード方式で出典を書く際に用いることがあります。〔鈴木 2021a〕のように、丸括弧（）を用いる場合と半々くらいかと思います。
- ・ 番号を振る際に丸括弧（）と区別するために用いることがあります。項目〔一〕の下に項目（ア）（イ）（ウ）を設ける等の場合です。
- ・ 図表や史料のナンバリング（〔表一〕〔史料一〕など）に使うこともあります。

* E さん／哲学史

別の訳語や呼び名がある場合に用いる、（）が二重になる場合に外側を角ブラケット

トにする。

* Fさん／芸術学

本文中では使わない。参考文献の原著や初版の出版年等のみ並記する場合に使うときがある。●●『』●●、1987[1985]、みたいな感じ。●●(1987=1985)『』●●、のように書く時は使わない。投稿先の指定や慣習に従う。引用者による操作をこれで示しているのを見たこともある（私は〔〕を使う）。

* Gさん／近代日本宗教史

自分では用いません。

木村のコメント

ハーバード方式での出典表記（Cさん）、丸括弧との区別（Cさん・Eさん）、ナンバリング（Cさん）、併記（Eさん・Fさん）、亀甲括弧同様の引用操作（Fさん）など、色々な用途で便利に使われていますね。

1.8. その他の括弧類

* Bさん／歴史学（明治メディア史）

特に使用していない

* Cさん／日本近代史

隅付き括弧【】：個人的な好みで、図表や史料のナンバリングには大括弧以上に隅付き括弧を用いることが多いです（【表一】【史料一】など）。

* Dさん／国際関係史

【】：タイトルには含めないが原稿のジャンルを業績一覧表のなかで表示したいときに使う。（テオドール・アドルノ【書評】『『没落』後のシュペングラー：シュペングラー『西洋の没落』第2巻』）

* Gさん／近代日本宗教史

特に用いません。

木村のコメント

隅付括弧はサブタイトルで用いられているのを見たこともあります。サブタイトルに使う記号は表紙と奥付で違っていることもあり、そのあたり大変ですね。

1.9. 括弧以外の約物（傍点など）

* A さん／哲学

傍点はたまに使います。ややこしい言い回しに注意を促すために使いますが、あまり多用すると見た目がごちゃごちゃするので最低限にしています。

例) ここでデカルトは、それが可能であると言っているのではなく、可能でないことはないと言っているのである。

* B さん／歴史学（明治メディア史）

傍点は、引用史料の原文に振られたもののみを使用。また、史料のうち特に説明したい一節に傍線を引く（約物に含まれるか分かりませんが）。

* D さん／国際関係史

傍点：その箇所を強調するとき（「」との使い分けはあまり考えていない…）

* E さん／哲学史

傍点は原文での強調箇所（イタリック）などを表現するさいや、自分の文章の強調箇所を示すために用いる

* F さん／芸術学

。、ではなく、.、を使う、というのは、理系および理系よりの社会学・心理学などでもよく見ます。ダッシュや三点リーダーなどの使い方も、厳しく決められているところはよく見ます。

* G さん／近代日本宗教史

傍点は、地の文を強調したいが当該部分が単語ではないなど、ノノカギでは適さないような場合に用いています。

木村のコメント

傍点と傍線の差異（Bさん）は、地の文か史料かという違いのようですね。折口信夫のように分析概念や外来語（ひらがな表記）などに対し傍線を引く思想家⁵が出てくるとまたややこしくなりますが……。

2. 括弧類の使用法について、ご自身で悩んだり、論文等を読んで疑問に思ったり、他の方と議論した経験があれば教えてください。

* Aさん／哲学

特にありません。

* Bさん／歴史学（明治メディア史）

新聞・雑誌類については『 』を付けない例もあるので、判断に迷う（が、結局『 』を使用する）。この点、他の研究者と意見が分かれた。

* Cさん／日本近代史

学部3年生の頃、「」内の「」は『 』に変換すべきものと思っていましたが、日本史学研究室の先輩からその必要はないと指摘されたことがあります。今では「」を二重に使うのが当たり前という感覚になりました。

* Dさん／国際関係史

国や言語圏、分野、学会ごとで定められたルールになるべく従うようにする。

* Fさん／芸術学

作品名や曲名などをどの鍵括弧で書くかという点が、分野ごとに、また同じ分野内でも流派ごとに違っているため、色々な方々から言及されるもの場合、それが音楽劇の作品タイトルなのか、音楽のタイトルなのか、戯曲（テキスト）のタイトルなのか、公演タイトルなのかなど、初見では少しとまどうことができました。

先輩や先生に聞き、「そう書くんだよ（それが常識だよ）」と言われた言葉を多方面

5 例えば、「定期にまれびととして来り臨む外に常世浪に揺られつゝ、思ひがけない時に、其島から流れて、此岸に寄る小人神があるとせられたこと、のるまん人等の考へと一つ事である。」といった形で用いています（折口信夫『古代研究 第二部 国文学篇』大岡山書店、1929年、72頁）。

から蓄積し、書き手の研究者個人個人の情報あるいは出版社と業界の関係等を詳しく知るようになったことで、自分の中で、「こういう考え方をする一派の人 or その一派内の教育を受けた人は、こう書くんだな」ということが推察できるようになったと思っています。

とはいえ、先輩や同級生たちに聞いても、「あー、ほんまや、違うねー。」ぐらいの反応で、あまりこの違いに戸惑っている様子はなかったという印象です。

今では書かれた方や研究分野や出版社の情報を念頭に読めるようになり、またそもそも当初よりも対象や関連事項について知っている情報が多くなったため、ちょっとぐらいの違いがあっても鍵括弧内のものが何か間違えることはないのですが、私が研究を始めた当初は学問分野間の派閥や差など分からなかったため、その違いや考え方によくこんがらがっておりました。

* Gさん／近代日本宗教史

元々は鍵括弧を用いていたいくつかのもの（分析概念や先行研究の引用）について、試行的にノノカギ等を使ってみようとしているのが現状です。そのきっかけは、ある研究会で参加者の先生から「あなたのレジメには鍵括弧が多すぎるのではないか」というコメントを受けたことでした。思想史という分野の性質上、史料上でどの言葉が用いられているかどうかは大事なので鍵括弧が多くなるのは仕方ないのでは……と思う一方で、確かに同じ分野でも地の文の強調や留保で鍵括弧が（時によっては過剰なまでに）用いられることが多く、そうしたものと区別する必要はあるな、と感じたため、それ以降、上述のように模索しています。史料上の用語だけに鍵括弧を限る旨、注記をつけたこともあります。

木村のコメント

最近読んだとある本（文学系、1990年代刊行）では、論文名に二重鍵括弧『』、収録書誌名に「」が使われていました。さすがにこれは特異例な気がしますが、人や分野による違いの由来が、好みなのか、ルールなのか、それとも常識（あるいはそのように思われているもの）なのか、という重層性が混乱を招いてしまうことはあるのかもかもしれません。

3. 括弧類の使用法について、論文執筆時の見本や参考にする／しうようなマニュアル等がご自身の研究分野にあるかどうか、教えてください。

* Aさん／哲学

不勉強のため存じ上げません。学部や大学院入学時にもらった文学部全体向けの「論文の書き方」みたいな冊子には、何かしら書いてあったような気がします。

* Bさん／歴史学（明治メディア史）

見たことはないのですが、主に『歴史学で卒業論文を書くために』（創元社 2019）などのハウツー本に書いてあるのでしょうか。

* Cさん／日本近代史

私自身は見たことがありません。

* Fさん／芸術学

論文誌では「投稿規定」として細かく決まっているものを見て参考にしています。特に特殊な記号を用いることが慣習となっているところでは、『音楽学』『音楽教育学』など。特殊な記号ではないけれども、使い方の定義が細かく決められているところでは、『社会学評論』など。一方、私が接する中で様々な学問ディシプリンを内包する学会誌には、括弧類の使い方を定めた投稿規定はありません。

書籍の場合（研究が論文よりも書籍で出されがちな分野にいます）、凡例でそうしたことが書かれていないことが多いうえにその人が属する流派の書き方を踏襲し、かつ出版社の意向も反映してさらに手を加えているため、書籍を中心に研究を読んでいた若いころは、それを参考に書いては指導教員に「書き方がおかしいよ」と修正を入れられる、といったことを繰り返していました。

* Gさん／近代日本宗教史

自分の分野で特に見たことはありません。

木村のコメント

Fさんが挙げる『社会学評論』スタイルガイドのように、分野によってはかなり親切に説明・指定があるということが新鮮でした。

なお、Bさんが挙げる村上紀夫『歴史学で卒業論文を書くために』では、鍵括弧を乱用せず意味を考えて使うべきことが述べられています（134頁）。

4. 括弧類の使用法について、参考になる情報の載った文献等をご存知であれば教えてください。

* Aさん／哲学

日本エディタースクール発行の『校正必携』や『編集必携』は、一応一般的なガイドにはなると思います。

* Bさん／歴史学（明治メディア史）

学術論文向けではないですが、石黒圭・熊野健志編『ビジネス文書の基礎技術—実例でわかる「伝わる文章」のしくみ』（ひつじ書房2021）の「1-2 的確な記号の使い方」に、「Q 13 カッコと句点はどのように組み合わせて使ったらいいですか。」「Q 15 カッコは主にどのカッコを使えばいいですか。」「Q 16 句読点とカッコ以外では、どのような記号がよく使われますか。」といったFAQがあります。

* Eさん／哲学史

山内志朗『ぎりぎり合格への論文マニュアル』

* Fさん／芸術学

論文誌の投稿規定。あと、書誌学や図書館司書の学びの中で、そうした違いに軽く触れてくれたものを読んだ記憶があり、「なるほどー！そういうところに学問の流派の系譜があらわれるのかー！」と目から鱗が落ちた記憶があります（肝心の文献や授業名や人名はすっかり忘れしました）。

木村のコメント

Aさんが示された日本エディタースクールには、まさしく「括弧類」も含む『日本語表記ルールブック』がありました。また、Eさんの挙げている山内『ぎりぎり合格への論文マニュアル』には、数学でしか使わない中括弧 {} まで含め、今回対象としたような様々な括弧類の使用法が出ています。時間があれば色々なハウツー本を見比べたいところでした。

むすびにかえて

3. でBさんが挙げていた村上『歴史学で卒業論文を書くために』に、木村大治『括弧の意味論』（NTT出版、2011年）なる書名が記されていました。人類学者である著者は、「括弧のことがずっと気になっていた。」と、まさに読者の声を代弁してくれるかのような書き出しを起点に、括弧の機能や歴史など、様々な側面に説きおよんでいます⁶。対象は学術論文には限られませんが、本企画に興味を持ってくださった方なら面白く読める本であること請け合いです。

ここまでで挙がってきた数々の先行文献と比べたとき、本企画の新しさは、異なった分野における実際の経験をお寄せいただいたことにあります。おそらくはこれをお読みくださった皆さんにおいても、同意できるところもあれば、自分の分野では違う、というところもあったのではないのでしょうか。はじめの「趣旨」と被りますが、このような差異の認識それ自体によって、分野間での学術コミュニケーションが少しでも円滑になれば幸いに思います。

6 なお、著者による「括弧率計算ページ」(<https://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/kakko/kakko.cgi>)によれば、ここまでの本稿における括弧率は4.17%でした。